母親の育児観・発達初期における母子相互交渉・児の気質的特徴が愛着形成・行動発達に及ぼす影響

三　宅　和　夫（北海道大学教育学部）

研究の背景

児の出生後１～２年における発達的変化の過程を的確に理解するためには，個体の生物学的要因と外的環境要因（特に母に関する要因）との継続的関連を縦断的に捕らえることが必要である。具体的には，本研究において児の生物学的特徴（気質）・母の養育観や態度・母子間の相互作用さらに母子を包む外部環境条件が児の満１～１½歳ごろにおける母へのアタッチメント形成にどのように関連しているか，さらには２歳ごろにおける児の自己意識・母からの圧力の受容度にどのように関連するのかということについて，妊娠３２週に対象者（初産第１子を分娩する予定の婦人）を選定し，以後約２年間の追跡を行うことを目的としている。

研究の方法

サンプルの選定の基準については，前年度報告に記してある。

前年度においては以下のような資料が収集された。

＜妊娠３２週＞面接…妊娠の受けとめ方，家族の受け入れ態度など。

＜妊娠３８週＞面接…分娩への態度，育児の計画など。

＜分娩後１日目＞…児の覚醒時３０分間の行動観察。

＜分娩後３，５日目＞…授乳場面観察。母親面接…児との対面・授乳などについて。ＲＩＳ測定…児にゴムの乳首をしゃぶらせそれを取り去ったときの泣きについて。

＜児の生後１，３ヵ月＞（家庭訪問）母子相互交渉の観察。母親面接…育児行動・児の行動など。児の気質についての質問紙（Carey らのものを参考に作成）

＜児の生後７ヵ月＞（実験室）母子相互作用観察。児の知的発達の測定。児の視覚的聴覚的刺激に対する注意や慣れの測定。見知らぬ成人への反応の測定。

本年度においては，以下のような方法で資料が収集された。

＜生後１１ヵ月＞（実験室）①母子相互作用観察…母子自由遊び場面１０分間の録画。②社会的準拠実験Ⅰ…児が母と離れて遊んでいる場面でカーテンのかげからラジコンで新奇な事物が児に近づいてくるという状況で，児がその物の方にはって行くとき，母が「喜び」，「恐れ」，「怒り」を表現する無意味な発話をする。この時児が前述の事物にさらに近づきさわるか，母の方に退避するかを録画する。これは母からの言語的コミュニケーションの効果，児のそれに対する感受性を明らかにするためのものである。

＜生後１２ヵ月＞（実験室）①児の母への愛着の測定Ⅰ…Ainsworth の考察したいわゆる Strange Situation を設定し，母への愛着行動，見知らぬ成人女性への反応，母と分離させられた後の再会時における反応を観察（録画）し，母への愛着の質を検討する。この Situation は8つの episode から成る。(1)母児を部屋に導入。(2)母児で３分間過ごす。(3)見知らぬ成人が加わり３分間過ごす。(4)母退室し児と見知らぬ成人の２人で３分間過ごす。(5)母と見知らぬ成人が入れかわり３分間母児で過ごす。(6)母が退室し児ひとりで２分間過ごす。(7)見知らぬ成人が入室し児と３分間過ごす。(8)母と見知らぬ成人が入れかわり３分間母児で過ごす。②愛着の測定Ⅱ…電池式のロボットの玩具を児の前で動かし，児が母を安全基地として行動する度合を観察する。③母への面接…児の１日の生活時間。日常における児の愛着対象。

＜生後１３ヵ月＞（実験室）①社会的準拠実験Ⅱ…視覚的断崖装置（強化ガラスの水平面の下半分が深く見え，半分が浅く見える装置）を用いて，母の表情による「喜び」，「恐れ」の表現によっ

て，児があえて深く見える部分を渡って母に近づくかどうかを観察する。録画とともに心拍の変化の記録がなされる。なお，母は深く見える方の端に立って発声なしで表情だけで「喜び」あるいは「恐れ」を児に示すのである。

<生後１６カ月>（実験室）①母児相互作用観察…できるだけ緊張の少ない場面で，母への愛着の量，行動様式，質をみる。遊びにおいて児が母をたよりにするか，母からの働きかけをうまく利用できるかをみる（１５分）。②児の自己認知測定…児の鼻に口紅をつけ鏡を見せたときに手をふれるかどうかをみることによって自己認知の発達度を測定する。

（家庭訪問）①児の発達検査（ＭＣＣ Baby Test）②母の性格検査（Ｙ－Ｇ性格検査）③家庭環境調査（ＨＯＭＥ）④母の児への接し方について…情緒的結びつき・しつけのきびしさ・母の考え方の柔軟性等。⑤母の児への発達期待調査。

研究の実施経過

<生後１１カ月>昭和５６年６月下旬より８月初旬に実施。

<生後１２カ月>同８月初旬より９月中旬までに実施。

<生後１３カ月>同９月中旬より１０月中旬までに実施。

<生後１６カ月>同１２月初旬より昭和５７年１月下旬までに実施。

以上の資料の収集の対象となった母児は，前年度実施した生後３カ月時には２６例，７カ月時には２１例であった。このようなサンプルの減少をカバーするため，生後１１カ月以降の資料収集に際しては新たに１０例を加え計３１例を対象として行った。しかしながら児がうまく観察の条件にのらないなどの理由で，実際の分析に耐える例数はこれより少なくなる場合が多かった。

これまでに行った資料分析の結果について

<生後１２カ月における愛着測定Ｉについて>

Ainsworth Strange Situation において児が示す行動，特に母との分離後の再会場面での児の行動に力点をおいてAinsworth らの方法によってＡ，Ｂ，Ｃの３グループに児を大別した。Ａ群の児は，母との分離場面で泣くことがほとんどなく，再会場面でも母を完全に無視するか，あるいは接近と回避の入りまじったような行動を示し，母を回避する行動がみられるのが特徴である。Ｂ群の児は，母との分離がなされる以前の事態では，母を探索のための安全基地として使用する。母との分離場面では，愛着行動が非常に強くなる。そのために探索行動は減少し，悲しみや苦痛をあらわし，再会場面では，母への接近や母との接触，相互交渉を求める。Ｃ群の児は，母子分離が行われる以前の場面ですでに不安の徴候を示す傾向があり，分離場面でも強い悲しみや苦痛を示す。そして再会場面では母との密接な接触を求めるが，それと同時に反抗的な行動・相互交渉をも示すという二面的な態度が特徴的である。このような基準によって対象となった２９例を分類した結果は次の通りである。

全体の約６０パーセントの児がＢ群すなわち安定愛着群であった。またＡ群すなわち回避群は７パーセントと非常に少ない。

ところでアメリカにおけるStrange Situation の研究データでは，Ｂ群が約 $^{2}/_{3}$ を占めるといわれており，われわれの結果よりややＢ群の比率が高い。またわれわれの場合Ｃ群すなわちアンビバレント群が３５パーセントほどあるが，アメリカのデータでは，これよりもはるかにＣ群の占める割合は少ない。このことは，日本では，児の生後１年間において母から離されてひとりで置かれるということが日常的にまれであるために，ひとりで置かれる場面で大きく情緒的に混乱してしまい，母との再会場面でその混乱から回復しにくくなるのではないかというように解釈できるかもしれない。再会時に母によって情緒的混乱から回復させられるということは，児が安定した愛着を母に対して形成しているということの重要な指標なのである。

もっともこのような日米のちがいについて別の解釈も可能である。すなわち日本の乳児は生来的に気質的に抑制的であり，Sensitive であるのかもしれないということである。さらにこれら２つの解釈を統合して考えることも必要かもしれない。すなわち気質的に抑制的で感受性が高いということが，新生児期から母に影響を及ぼし，母の

児に対するかかわり方もそうした児の特徴にあわせたものになり，母児の相互影響がこうした傾向を維持せしめるということである。

ところで，つぎの表は最近発表された西ドイツにおけるStrange Situationの研究結果と，われわれの結果ならびにアメリカにおける主要な2つの研究の結果を対比させたものである。この表から，西ドイツにおいてはA群すなわち，回避群が約½を占めていること，B群が⅓しかないということが分かり，西ドイツにおいてA群が，日本においてC群が多く，アメリカがその中間であるといえよう。

西ドイツにおける育児が児を初期からしばしば母から分離する傾向を特徴としているといわれるが，これと愛着のタイプにおける傾向とに対応がみられるということが推測される。

研究の目的についてはじめに図示したのであるが，われわれは生後11カ月までに収集されたすべてのデータについて目下分析を進めており，それらの結果とStrange Situationの分類結果を細かく対比させて検討したいと考えている。そのことによって上述してきたことについてある程度はっきりした因果的関係を発見することが可能になると思われる。このことは次年度においてなされるべき重要な課題である。

さらに，われわれのC群に属する児のうちには，生後1年間における母子関係が良好であったものがかなり入っているということが指摘されなければならない。これは，このStrange Situationが日本の児にとってはStressfulである度合が高すぎることによるのではないかと推測される。アメリカの基準によれば，A，C群は愛着形式において問題のある群であるが，われわれのC群のすべての児を問題ありとしてしまうことがよいかどうかは十分に検討しなくてはならない。そのためにも今後生後2年までさらにこれらの母児を追跡してデータを収集し，はたしてどのような発達コースをこれらの児がたどるかを明らかにしなくてはならない。そうすることによって生後1年間における望ましい母子相互作用についての貴重な提言をすることが可能になるのではないかと考えている。

＜生後13カ月の社会的準拠実験Ⅱについて＞

この方法はさきに述べた通りであるが，実験が成功したのは23例であった。このうち12例は母が「喜び」の表情を示す条件で，11例は「恐れ」の表情を示す条件で観察が行われた。児の視覚的断崖装置の上での行動はいろいろな視点から分析されるのであるが，ここでは深く見える側を渡って母のところへ児が行ったかどうかの結果を示すにとどめる。次の表から「喜び」の条件下のほうが，「恐れ」の条件下よりも児が深い側を渡って行くことが多いという傾向があることが分かるが，この差は有意水準に達してはいない。ところで，ほとんど同じ条件によって行われたアメリカでの実験結果（Campos et al. 1981）では，表に示すように2つの条件間で有意差がみられるのである。このことからアメリカの児の社会的準拠の能力が早く発達するということを断定するわけにはいかないであろう。しかしアメリカの母親が日本の母親よりも表情によっていろいろの情報を乳児に伝えることが多いということは推測できるように思われる。この点についてはさらに検討したい。

われわれが社会的準拠の実験を行った目的は，2つの条件間の差をみるということよりも児によって表わす反応が異なるのではないかといういわゆる個人差の問題である。すなわち「喜び」条件においても深い側を渡らない児，「恐れ」条件においても深い測を渡る児もある。さらに母の情緒的表出に対してよく準拠する児とそうでない児がある。こうしたことが生後1年間における母子相互作用や児の気質とどのように関係しているのかの検討が重要である。こうした点について目下資料の分析を始めつつあり，このこともまた次年度においてなされるべき重要な課題である。

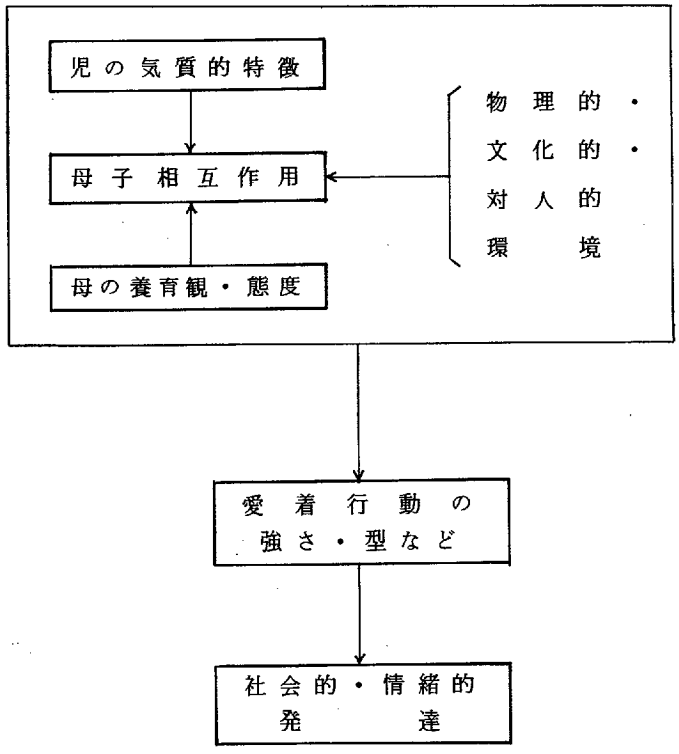

図1　研究のねらい

表1　愛着行動の分類

	A（回　避　群）	B（安定愛着群）	C（アンビバレント群）	計
男　児	1	8	3	12
女　児	1	9	7	17
全　体	2	17	10	29

表2　愛着行動の分類 ――――― 米・西独・日の比較

	A Group	B Group	C Group
Ainsworth et al. U.S. 1978	21.7%	66.0%	12.3%
Main et al. U.S. 1981	28.3%	67.4%	4.3%
Grossmann et al. F.R.G. 1980	49.0%	32.7%	12.2%
Miyake et al. Jpn. 1981	6.9%	58.6%	34.5%

表3　視覚的断崖実験の結果

日　本	喜び条件	恐れ条件
深い側を渡る	8 (66.7%)	4 (63.4%)
深い測を渡らない	4 (33.3%)	7 (63.6%)

a）Miyake et al. 1981

米　国	喜び条件	恐れ条件
深い側を渡る	14 (73.7%)	0 (0%)
深い側を渡らない	5 (26.3%)	17 (100%)

b）Campos et al. 1981

検索用テキスト　OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

研究の背景

児の出生後 1〜2 年における発達的変化の過程を的確に理解するためには,個体の生物学的要因と外的環境要因(特に母に関する要因)との継続的関連を縦断的に捕らえることが必要である。具体的には,本研究において児の生物学的特徴(気質)・母の養育観や態度・母子間の相互作用さらに母子を包む外部環境条件が児の満 1〜1 1/2　歳ごろにおける母へのアタッチメント形成にどのように関連しているか,さらには 2 歳ごろにおける児の自己意識・母からの圧力の受容度にどのように関連するのかということについて,妊娠 32 週に対象者(初産第 1 子を分娩する予定の婦人)を選定し,以後約 2 年間の追跡を行うことを目的としている。